

令和6年度

第2回総合教育会議  
会議録

とき 令和6年12月24日

品川区

令和6年度第2回品川区総合教育会議

日時 令和6年12月24日（火） 開会：午後4時00分

場所 品川区役所 第二庁舎5階 251会議室

出席者	区長	森澤 恭子
	副区長	新井 康
	教育委員会教育長	伊崎 みゆき
	同 職務代理者	吉村 潔
	同 委員	稲垣 百合恵
	同 委員	濱松 誠
	同 委員	吉原 幸子

出席理事者	区長室長	柏原 敦
	総務課長	勝亦 隆一
	教育委員会事務局教育次長	米田 博
	同 庶務課長	舩木 秀樹
	同 学務課長	柏木 通
	同 指導課長	中谷 愛
	同 教育総合支援センター長	丸谷 大輔
	同 特別支援教育担当課長	唐澤 好彦
	同 品川図書館長	河内 崇

傍聴人数 なし

次第

1. 開 会
2. あいさつ 品川区長、教育長
3. 講 演  
(講演テーマ) 戸田市の教育改革の取り組み  
(講師) 戸田市教育委員会 教育長 戸ヶ崎 勤 氏
4. 閉 会

○区長室長

それでは、定刻になりましたので令和6年度第2回品川区総合教育会議を始めさせていただきます。

品川区総合教育会議は、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第1条の4に基づきまして区長と教育委員会が十分な意思疎通を図り、品川区の教育の課題等について協議・調整を行うことにより、相互の連携をさらに強化することを目的として開催するものであります。

本日、傍聴の方は現在いらっしゃいません。

本日の会議におきましては、記録用にカメラ撮影をさせていただきますので御了承いただければと思います。

それでは、開会に当たりまして森澤区長より御挨拶をいただきます。

区長、よろしく願いいたします。

○森澤区長

本日は、第2回目の総合教育会議にお集まりいただきましてありがとうございます。

講師の方をお招きしての開催は、2回目ということになります。

品川区ではこれまで、「プラン21」や「品川教育ルネサンス」などの教育改革、そして義務教育学校の設置や区独自教科であります「市民科」を創設するなど、様々な取り組みを進めて参りました。

今年は、いじめ相談窓口の区長部局への設置や、学用品の無償化など、教育委員会だけではなく、区全体で子供たちやその保護者に対する様々な施策を展開しております。

そして本日の総合教育会議におきましては、全国から注目をされておまして、引っ張りだこでいらっしゃいます、お忙しい中お越しいただきました、埼玉県戸田市教育委員会の教育長であります戸ヶ崎勤様にお越しいただきました。ありがとうございます。

これまでの教育、学校のあり方の当たり前を問いただしていくということで、科学的なアプローチであるとか、産官学の連携であるとか、様々な形で、教育改革に取り組んでおられますので、ぜひ、そういった知見を共有いただき、意見交換させていただきたいと思っております。そういった知見を共有いただいて、品川区の今後につなげていければと思います。本日はお忙しい中ありがとうございます。どうぞよろしく願いいたします。

○区長室長

ありがとうございました。

続きまして、教育委員会を代表いたしまして伊崎教育長から御挨拶をいただきます。よろしく願いいたします。

○伊崎教育長

品川区教育長の伊崎でございます。

戸ヶ崎教育長様におかれましては、本当にお忙しい中、品川区までおいでいただきありがとうございます。

区長からお話でしたが、戸田市の教育改革の取り組みということで、教育長様は尖ってはいないとおっしゃいましたけれども、尖った改革を様々なさっておられますので、その内容をお伺いできることを大変うれしく思います。

私といたしましては、そういった組織をどのように作っていくのか、作ってきたのかというところを学ばせていただきたいと思います。本日は、どうぞよろしく願いいたします。

○区長室長

ありがとうございました。

それでは、講演に入ってまいりたいと思います。

本日は、埼玉県戸田市教育委員会 教育長であります戸ヶ崎勤様にお越しいただき、「戸田市の教育改革の取り組み」をテーマとして講演いただきます。

2015年に戸田市教育委員会 教育長に就任し、国のGIGAスクール構想に先駆けてICT教育に力を入れたことで、学校現場や教師の意識改革が進み、今では数々の先進的な実践で全国から注目される存在となっております。

現在は、戸田市教育委員会の教育長のほか、文部科学省の中央教育審議会委員などを務められております。ご紹介は以上になります。

この後、ご講演をいただきますが、質疑などは講演が終了した後にまとめて行いたいと思います。また資料につきましては、前方モニターをご確認いただければと思います。

それでは、戸ヶ崎様どうぞよろしく願いいたします。

○戸ヶ崎教育長

はじめまして。戸田市教育委員会教育長の戸ヶ崎でございます。先ほど来、過分なお言葉をいただいて、穴があったら入りたい。どちらかという、私としてみたら品川区の教育の背中を追いかけてきたというか、常にまぶしく拝見させていただいているということで、私が逆に色々とお話を聞いて学ばせていただかなくちゃいけないというふうに思って、今日は参りました。

先ほど教育長から話のあったように、別に尖ったことをやるのが目的ではなくて、目の前にいる子供たちが将来社会に出たときに困らないようにしたいという、その一心で教育を、やれることはとことん何でもやろうという思いで、事務局一丸となって取り組んできたというのが正直なところですので、何か新しいものとか、当たり前をひっくり返してきたわけではありませんので、その一端をお話できればと思います。

スライドが100ページくらいありますので、かなり駆け足になると思います。

みなさんがどの分野に関心があるのかわからないので、ざっと説明させていただいて、質疑の中で補足説明させていただくようなやり方でお話しさせていただきます。

埼玉県戸田市は、東京と隣接してるということもあってですね、品川区の場合もそうかもしれませんけれども、日本全国少子高齢化の中にあって、子供の数がどんどん増え続けていくというところがあってですね、教育費が16%って非常に高いですよ。ですからこの16%の大半が、バブル時代に建てた校舎の老朽化と、学校の増築とっていうそういうハード面、それから人をできるだけたくさんつけようということで人件費にお金がかかっていてですね、ソフトにはお金が回らないという非常に苦しい状況が続いていて、キャッチフレーズは「知恵を出せ」、「汗を出せ」、「元気を出せ」、「それが駄目なら辞表出せ」っていうキャッチフレーズ、最後冗談ですけど、取り組みをしています。冗談はともかく、本当に知恵を出すということに関しては、相当エネルギーを割いてやっていくということがあります。

ちょうど明日、中教審の総会でYouTubeでも公開されますけど2本諮問が出るようです。学習指導要領の諮問と、教員養成の諮問が出されます。それらの関わりで中教審などでいろいろとやらせていただいています。

今、学習指導要領等に向けても、こういう政策パッケージというのが出されて、東大の藤井総長を中心にして、いろいろ経団連とか中教審からの代表の方が出席され、私も末席で関わらせていただきました。このスライドですが、いわゆる教室の中に多様性があるかっていうことを今改革の中でしっかりと考えなくちゃいけない。

もうこのスライドだけでも、解説してると1時間かかるんですけど、ざっくりというと、特別な支援が必要な子も、これだけの割合いる。さらに、不登校の子供も傾向の子も合わせると、これだけいる。また、意外にあまりマスコミ等で言われてないのは、家に本が少ない。少ないって何冊かって言うと、国の基準だと25冊って言われてるんです。25冊以下の家庭っていうのが、30%超えて非常に多いんですよ。

あとは日本語を話さない。これはただ国の平均なので、学校によってはたぶん、品川区でもかなりでこぼこがあると思います。戸田市でも、日本語をほとんどしゃべらないっていうのが20%近くいる学校があります。ですから、これはあくまでも平均値なので、相当に開きがある。しっかりとまずこの多様性をですね、今ダイバーシティ&インクルージョンっていう言葉で言われてますけれどもそれをしっかりと理解した上で教育をやっていかなくちゃいけない。そういう意味では福祉部との連携だとかは不可欠になってきてるんじゃないかなというふうに思います。

さらに、様々ですね今当たり前のように行われているものを変えていく取り組み。例えば、一斉の授業は子供主体の学びに変えていく、同一学年でやっているものは学年に関係ないものに変えていくとか、こういう形でシフトしていくっていうのも、いろんなことは一致しないことがあったんですけど、

皆さんが合意しました。

さらに、子供の今置かれてる環境としてしっかり抑えなくちゃいけないのは、このフィルターバブル現象、それからエコーチェンバーっていう現象というもの。これが当たり前のように起きていて、様々、買い物するにしても何にしても、自分が求めないものがどんどん出てくる。さらに、今回の様々、選挙なんかでもそうだったんですけど、兵庫県の選挙にしても東京都知事選にしても、SNSの在り方っていうものが、やっぱり子供たちにメディアリテラシーというものをしっかりとつけていかなくちゃいけないんじゃないかっていうことは、本市も危機意識を持って今取り組みを行っているところであります。

それから、まさに教育委員会のあり方っていうことで、有識者会議で今年の7月にまとめが出されました。これは教育委員の皆さん方はご覧になったんでしょうか。これはですね、ぜひ皆さん見てもらいたいということで、ご存知の通り三鷹市の前市長の清原先生が座長で、私が副座長という立場で関わらせていただいたんですけど、こういうまとめがあってですね、こういうポンチ絵1枚出てるんですよ。この中に全部凝縮されてるわけです。

それぞれの立場が疑問に持っていること、まさにこの総合教育会議なんかについては、こういうような位置付けだということは、このポンチ絵は本当によくまとまっていて、これ一枚見れば、これからの教育委員会がどのような動きをしなくちゃいけないかっていうことが一つにまとまってるって言っても過言ではないものであります。

そのあとに、また改めて手引きというものが出されました。本市の取り組みなどもいろいろ載っているわけですがけれども、この中で、全体見ていくとこれからの教育委員会のあり方っていうの方向性がよく見えてくるかなと思います。

それで、たまたまこういうこれは20分ぐらいの動画ですがけれども、このQRコードから見られますし、文科省のページにも載ってますので、ぜひご覧いただくと、何となく概要がわかるかなというふうに思っています。

その際に、この報告書の中にも取り上げていただいているんですけども、ちょうど平成27年の4月、私が教育長を拝命したときに地教行法が変わって、教育委員会制度のあり方っていうのが大きく変わった年なんですよ。これは、途中から変えるわけにいかないだろうということで、この平成27年からこういうものを打ち出しました。10の心構えというもの。それも先ほどの報告書の中にも載ってるわけですがけれども、キーワードは何かというと、活性化と透明性。追認から提案。傍聴人は必ずいること。さらに詳細な議事録を作ること。これはもう欠かさずやっていこうということで、自慢なのが平成27年4月から傍聴人は定例の教育委員会に来られます。傍聴人の数を増やしていくことをしたというのも、一つ大きな試みだったかなというふうに思っています。

もう一つは、うちの教育委員会は、事務局の提案ではやらないんですよ。

教育委員さんが、次回の教育委員会はこれをやってくださいっていうのを提案するわけです。今ちょっと膨れ上がっちゃってるんですけども、毎回、全員が最低1つは出すんです。例えばICT活用。GIGAをちょうど進めたときに、戸田市はいろいろとICTのことは一生懸命やってるのはわかるけど、あまりに学校の格差がありすぎるんじゃないか。この間行った学校は一生懸命やってるけど、この間の学校ではやってないじゃないかって。何で同じ市内であれだけの格差があるんだとか、小学校と中学校で全然差があるよって。小学校は使ってるけど中学校は全然やってないんじゃないかとか。あとは使ってるんだけれども、どう考えたって学びは深くないんじゃないかとか。こういうのが教育委員の方々から出されるわけです。

それで、教育委員会事務局の立場は何かというと、議会の常任委員会より苦しいんです。何でかっていうと、その教育委員さんが、この提案をいただくその前提っていうのは、何をもとにしてるかということ、すべて学校だとかを見に行ってますね、現場を見て話をさせていただいている。評論家じゃないですよ、名誉職じゃないんです。市民の代表として、教育委員会の中で何を事務局に言うか。あとは教育長をしっかりと見届けていかなきゃいけないという自覚があるわけです。教育長を暴走させちゃったらいけないと。何か問題点があるはずなんだっていう目で、いつも疑いの目で私は見られているので、そういうところから提案をいただいているわけです。

ですから、これ全部開示していますので、後で見ただけであればと思うんですけども、もう事務局は、そのいただいたものに対して、ポンチ絵を作り、それを解説するために結構時間や労力を費やすんですけども、それがまた勉強になっているわけですね。お互いにとっていい関係になっているのが、一つ活性化に繋がっていくのかなというふうに思っています。

あとは極力、研修会で教育委員さんにも勉強してもらおうし、教育委員会事務局の上司であるという心構えは必ず強く持っています。

ですから、例えば、いじめの問題だとか、生徒指導事項だとか、教職員事故だとか、何か危なっかしいものが起こったときには、第一報を必ず入れます。こういうことが起きています。実はこういうように動こうと思っているんですけどよろしいでしょうか、っていう。あくまでも上司ですから、判断を委ねるというそういうやり方を事務局の方もやる。後になってから事後報告をするということはないようにするという取り組みを行っているということです。

さらにそういうことをやる中で、教育委員の前で、校長が定期的に面談をやりまします。働き方改革がちゃんと進んでるのかとか、こういう特色ある教育活動がどうなんだろうとかそういうことを、教育委員の前で校長たちがプレゼンを行うということを定期的にやっています。あとは研修ですよ、いろんな研修を教育委員自身がやる。

それで、教育委員会の議事録はすべて開示してる。私は会議の冒頭で、あいさつを兼ねて必ず5分ぐらいしゃべってるんですけども、そういうものも全

部ですね、一言一句、詳細な議事録をアップするっていうことでは、心構えとしてやっています。

さらに、これもまた勉強になるんですが、他の自治体いろんなところから、こぞって教育委員さんたちが戸田市に来ると。終わった後に、質疑応答をするというようなこともやっています。

さらに、ただ来られるだけじゃなくてうちからも行こうということで、一番の直近では岐阜県岐阜市に行って、移動教育委員会と称して向こうの教育長のプレゼンをやってもらって質問をする。自分たちから行っておきながら質問するみたいな感じで、いろいろ活性化をしながら、自分たちも出ていこうというような試みもやっています。

結論として、教育委員会ってどういうところなのって、結構聞かれるところがあるんですけども、基本的に教育改革っていうのは、国だとか教育委員会から起こるじゃなくて、やっぱり現場から起こるべきなんじゃないか。そのためには、教育委員会というのはマネジメントを一律の管理から個別の支援にシフトして、あくまでも教育委員会というのは黒子に徹して、主役の学校に伴走して、積極的な自走を支援していく。黙っていると、はみ出してっちゃったり、わき道に反れたり、どんどん先いっちゃったりとか、そういう学校が出てくるので、そういうところはコントロールしていくっていうのが、教育委員会の役目ではないかということで、ずっとやってきて、これはもう学校とも共通理解を図っているところであります。

もう一つは、ちょうどこれ次の学習指導要領の改訂が明日の諮問にも繋がっているところなので、これからの学習指導要領についての論点も入っています。

あとは、最近流行っているのは教育データの利活用ということで、あんまり今までの教育では語らなかつたんですが、私は非常に重要なものだというふうに思っています。教育データを積極的に活用できるような、そういう環境をつくっていくことが、これからは重要ではないかなというふうに思っています。

あとは働き方改革ですね。一番意見を言いました。教職調整額の大幅アップ、さらには学級担任手当、あとは管理職手当、さらには、特別支援コーディネーターの手当と、こういうものを全部つけるべきだっていうことを、侃々諤々お話をしてやったんですけど、多分今日あたりが文科大臣と財務大臣とで話し、明日結論が出るんだろうと思います。

ただ、人をつけるってことについてと、あとは中学校の35人学級。これも徐々に実現しそうだなと思います。

あとは教員養成部会。これも明日諮問が出てきます。免許法だとか、こういうのも変えていかなくちゃいけないということで、多分この教員免許の養成のあり方も大きく変わると思います。社会人がどんどん入ってこられるように。多様な入職ルートということで、1回社会に出て、経験した人が学校現場に入ってくられるような仕組みを作らなくちゃいけないだろうと。教員

養成の大学だけでやってるから村社会になっちゃうんであって、いろんな人を受け入れるような、そういうあり方を、システムをつくっていかなくちゃいけないだろうということ。

それと、もう何十年って変わってないんですけど、教師の基盤。非常にふわっとしてるんですけども、こういうものは最低限教職に必要な素養としてつけていくべきだと。従来までは学習指導と生徒指導という2本柱だったんですよね。つい数年前から養成課程の中でも、特別な支援、これを勉強してもらわなくちゃいけない。さらに、先ほど申し上げたICTや教育データ、これから入ってくる教師はこれを勉強してるわけですよね。だから、現職としても学校側でもそれを受入れるような、システムになってなくちゃいけないんじゃないかということです。

さらに先ほど来、お話しもちよこちよこ出てるんですけども教育の中で、私は非常に大事なんじゃないかって思ってるのは、風土と水っていう部分があるんですよね。これは何かというと、もうまさにご案内の通り、風の人っていうのは言葉は悪いんですけど、よそ者、外部の改革者。土の人っていうのは地元の人。これのどちらがいいのかっていうと、一概にこれ言えないわけですよ。教育会にも風土とかさらに水っていうのがあるわけですね。風土以外に水に合うとかっていうのは、いろいろ教育界の外に言うときはいろいろなものを見いだして、例えば品川区で、花が咲いたから、戸田にそれを持ってきて花が咲くかっていうと、その逆もですけど、うまくいかないものがあるわけですよ。

それは何かというと、まさに風土というものがあって、市民の理解だとか、そういうものが根強くある。そこの土地ならではのものってのはあるわけですよ。その辺をいかにバランスを見抜いて保っていくかっていうことに尽きるんじゃないかなと私は思ってます。

教育改革をやっていくときに、この風土というものがしっかりとらえられて水に合うようなものになっていけばですね、どんどん入ったとしても根づくだろうと思います。でも、そこに合っていないことが、そちら側で綺麗に咲いている花を切花にして持ってきて植えたって絶対根付かないですよ。仮に引っっこ抜いてきて、根っこがついてるからってそこに植えたって、やっぱり根付かないっていうこともあるわけですよ。だからその辺のバランスを、どのぐらいのタイミングでどういうものだったら根付くかっていうことを考えていくっていうことに、まさに教育改革の肝というか、それを見抜く力っていうのが非常に大事なんじゃないかと思います。

本当はそういうものがちゃんとできていれば、よく言われる政策波及っていうものがもっと進んでるはずなんですよ。でも、いろんな行政の自治の中でも教育がどうも進まないっていうのは、横展開、政策波及できないっていうのは、やっぱりこういうものが根強いだろうと思います。福祉だとか土木だとか、様々ないろんな行政の仕事の中でも教育が政策波及できないんですよ。それはやっぱり、人が人を育てるっていうものについては、どうも風土

というものが、障壁にもなっているのかもしれない。

よく言うように、熱帯魚を飼ったことがある人であればわかるんですけども、水の入れ替え過ぎっていうのは熱帯魚が死んじゃうわけですよ。半分ぐらいやったら半分は入れ替えないようにするっていうのは鉄則なわけですよ。

それは教育においても同じで、どの程度の水の割合を入れ替えていくかっていうことが、改革のミソだと言っても過言ではないのかなと。非常にふわっとした話なんですけどね。

ここからが戸田の教育の話なんですけども、埼玉県民、埼玉県の教育関係者であれば、あの戸田ねって言われるぐらい非行問題の巣だったんですよ。多くの学校が荒れてるというのが、ちょっと前までの本市でした。だから埼玉の教育関係者のイメージがまだ戸田は悪いっていうそういう感じなんです。実際、若干そういうところは残ってるんですけども、そのイメージによる悪循環があったわけです。

これをどうやって改革していこうかというので、いろんな取り組みをしてきたわけですけども、戸田市には行きたくないっていう教職員がほとんどでした。でも今は戸田市に行きたいっていう教職員がどんどん増えてきているのはありがたいなと思います。

改革のコンセプトにしているのは、あんまり表には出てないんですけど、すべての学校が先進校であり視察対象校であるという自覚を持ってもらってます。大体自治体って、ある程度の規模になってくると中心校っていうのがあるんですね。その学校は人事異動なんかでもその学校に行けるっていうのは、校長はエリートというかですね、一番実績のある校長がそこに行って教員もその学校に行くということはモチベーションも高く、ナンバースクールみたいなところがどこにもあるんですけど、うちはそういうのありません。全部が先進校であり視察校である。いろんな視察があるんですけども、大臣が来たりとか、その他もありますけれども、全ての視察がどこに行くかわかんないんです。可能な限りイエスで受け入れてくれるようにしています。偏らないように。偏る学校ができちゃえば受入れるのも楽なんですけども、そこにだけ偏らないようにするということでもどこに行くかわからない。施設が汚い学校に視察が入るかもしれないし、授業の質がさほどでないところに入るかもしれないということで、でもそれを機会にして、人間というのは、特に教師というのは、見られれば見られるほど美しくなるっていう、これは私のこだわりなんです。見られなかったら駄目だと。だから大いにそれは受け入れて視察は断らないっていうのがコンセプトなんです。関心を持たれてるうちが花ですから、絶対にいずれは見向きもされなくなるので、今、そういうのがあるんだったら絶対に受け入れるようにしています。

戸田市の教育改革の四つの柱について、生成AIも初めから、このコンセプトの1個でもあったので、私も一昨年の秋ですかね11月ごろに、チャットGPTが出たときからもう毎日、グーグルの検索以上に使ってるっていうのがある

んです。市としてもそういう部分の取り組みも進んでるということですね。

そして次のコンセプトは、教育現場を科学するというもので、3つのものを行っています。歴史が長いのは授業を科学していこうという取り組みです。様々やってるんですけど現場はあまり喜ばないんですよ。余計なことしてくれるなんて。

そして、生徒指導を科学する。まさに不登校だとかそれを科学していこうと。教師の気づきだとか保護者の気づきだけで、今までやってきたんですけども、それではやっぱり限界があるだろう。いかにデータを使いながら科学していくかっていうところに力を入れて、一定の成果が上がっているのかなと思います。

また、学級・学校経営を科学するというような取り組みもやっています。

それから、教育村だとか学校村って言われてるなかなか心を開かない学校現場に対して何を言い続けてきたかって大きく四つのことがあります。

一つは、とにかく子供が出ていく社会に困らないようにする。Society5.0の時代だとかいろんなこと言われてるわけですけども、先生方が自分たちの今目の前にいる子供たちはこういう社会に出てくんだって、青写真描けるかっていうことなんです。そこをしっかりと、この子供たちが出ていく社会ってこういう社会なんだということが言えるようにしようと。教師のPBLなんです。

それと、学校という学びの場が未来を感じられる空間にしようじゃないか。これは何かというと、昔は黙っていても学校というのは憧れの場所なんです。それは登校とか下校という言葉があるように、学校には上がってくるし、下校は下がってくんですよ。それは何でかといったら社会的地位が高い場所なんです。そもそも家庭にはないオルガンがあります。家庭にはない鉄棒があります。顕微鏡があります。望遠鏡があります。物だけだってわくわくするようなものが、学校には昔あったんですよ。今はどうか。別にタブレットなんて、パソコンなんてどの家庭にだってあるじゃないですか、それを見て、ちょっと前だったらわくわくしますよ。パソコンだって。今なんか全然別に、何これっていう感じなわけですよ。中には家庭の中には、もう3Dプリンターがあったり、レーザーカッターがあったりする家庭まであるんですよ。学校よりはるかに進んじやってるわけです。だから、未来を感じないんですよ。

じゃあどうするかといったら、授業の中でソフトで未来を感じられるようにするわけです。わくわくするような授業を展開してよって、これはずっと言ってます。もう物ではひきつけられないんだから、とにかくソフトウェアというか、そういうような授業をやってくれということ。さらに、リスクを恐れるなど。凡庸な90点の取り組みなんかやってんじゃなくて、60点でもいいから夢のある取り組みをやろうじゃないか。ということは繰り返し言ってます。

これを言ってですね。だんだん学校は自走を始めました。教育委員会は、

こういう風なことであんまり細かいことに口出ししなくなったんだなと感じ  
とって。さらに失敗をどンドンしちゃっていいよ、咎めないよってことを言  
ってますから、こういうね、90点の取り組みよりも60点でもいいから、冒険  
を試みようという気持ちになって、それぞれの学校が自走から始まって、  
簡単に言えば好き勝手なことをいろんなことをやってるっていうのが、本市  
の意識改革のプロジェクトであるということです。

さらにこういう動画もつくってあります。結構これは受けたというかです  
ね。全部見ると20分ぐらいかかるんですけども。振興基本計画は紙のもの  
はできるだけ薄く、もうこれはこの間の議会でも叱られたんです。教育長お  
かしいんじゃないかって。紙が1枚の振興基本計画でも、こうやって動画の  
中で丁寧な解説してるんです。ここには相当エネルギーをかけて動画を作っ  
ています。また新たなものを今バージョンアップしようかなというふうに思  
っています。

あとは、脱正解主義、脱自前主義、脱予定調和、さらに働き方改革ですよ  
ね。これは肝いりで進めてきました。この授業改善、業務改善のトリガーに  
していこうと、きっかけづくりにしていこうということで、言葉だけじゃな  
くてですね、本当に働き方改革を真剣に取り組もうということでもあります。

こういったことも、この総合教育会議は取材を受けたんですけども、も  
うまさにこういう働き方改革は総合教育会議の場でやるべきだろうというこ  
とで、こういうことに対して総合教育会議の中で熟議をしました。で、議員  
さんにも質問してもらおうというような取り組みもします。さらには学校運営  
協議会すべての学校で、この3分類についても扱いました。

そしたら、非常に印象的だったのは、何でこれを、こんな大事なことを我々  
にもっと話をしてくれなかったんだっていうことが、この運営協議会の委員  
の方から出たんですよ。もっと早くに言ってくれれば、我々だって手伝えた  
のにつて。何で学校はそれを言わなかったんだって逆にお叱りを受けたっ  
ていうことがあってですね。最近「受援力」という言葉がありますよね。助  
けてが言えるっていうことなんですよ。これは非常に私は重要なんじゃない  
かな。自立するっていう言葉なんかも、自分で立つんですから、人に頼らな  
いっていうのが事実だと思いますが、それは間違いで、援助してくれる人を  
いかに持つかっていうね、たくさん持てるっていうことが自立であるって  
いうような会社もあるんですよ。だから受援とか自立っていう言葉は、まさ  
にこういうものにも当てはまっていくんではないかなと。「ヘルプシーキング」  
なんて言葉で最近言われてますけどね。そういうのを非常に大事。

あとは産官学の連携も約100近いところと、いろんな連携をしています。ICT  
だけとっても、有名な企業と連携して、実はこれがどんどん増えてですね、  
アメーバのように広がってるんですよ。で、何がうちの特徴かっていうと、  
普通これだけいろんなところでやったらお金どうするんだらうって、なるじ  
ゃないですか、ほぼかかってないんです。お金が動いてないんです。それは何  
でかという、企業にとっても、我々自治体にとってもWin-Winの関係に

なるっていうことを考えている。

これは珍しいんだろうなというふうに思ってるのは、校長会議の中に、産業界が入ってくるんですよ。校長会議の打ち合わせの中に産業界がプレゼンをするんです。で、内々で、今こういうものをつくったんだけどもどっかでやってくれないかっていうことを、教育委員会が何かコントロールするわけではなくて、学校で考えてもらってるんです。どんどんそこで自走が始まっていくと。ですから教育委員会が知らないでいろんな企業と各学校が連携をするってというのが、今はもう当たり前になってるわけです。校長会はきっかけづくりですよ。あとは独自に学校が、企業とマッチングして、いろんな取り組みをしていくっていうことであります。

大体一般的にエビデンスを一定のものを出すということになると、私は2年ぐらいかかると思っています。1年でその効果検証するってというのは、教育の場合には厳しいと思っておりますので、2年間は実証期間として使わせてもらう。それで、本当に効果があったもの、コンテンツがすばらしくエビデンスが一定のものが出来れば予算化して、全校でやるっていうなことももちろんあります。

ですが、なかなか最近のこのICT関係なんかのコンテンツってというのはそう簡単に成果が出るものではないので、やっぱりそこは、学校を実証の場として使ってもらってWin-Win関係をつくると。私はクラスラボ計画って呼んでるんですよ。企業の方が来ても、Win-Winの関係だけはしっかりと築いてやっていくということで、同意をしながら進めていくということは今も学校レベルでそれをやってるということです。

一番、こだわりを持っているのは、教育委員会では新たな学びの材料とか人材は教育委員会で用意していくけれども、料理は学校でやってくれということ言ってるんですよ。だから、一見すると違うんですよ。西洋料理をつくる学校、中華料理をつくる学校、また日本料理をつくる学校って。使ってる材料は一緒なんですけれども、学校によってレシピを考えて、それが違うので何かバラバラなことをやってみたって、これも実は、議会なんかでも怒られるんです。公立の学校なんだから同じことをやれよって。でもそういう時代ではない、どんどん自走してもらおうと私はいいんじゃないかなというふうに思ってます。

あとは、産官学と連携して何でそれが進むかというところは、最先端のリソースを入れられるってことと、アウトソーシングとして任せられるものはどんどん外部に任せるっていう考え方が定着してきたんです。だから産業界と連携するっていうことに対しても抵抗感がなくなってきたということは言えるんじゃないかなというふうに思っています。ここはもうICTで、どういう考え方でGIGAの前から、うちでは進めてきたんですけれども、キーワードは「JUST DO IT」というのと、「百聞百見は一験にしかず」。これ松下幸之助の言葉なんですけれども、100回聞いたり見たりするよりも1回教師が経験すれば、それで腹落ちすることが一番大事だということで、とにかく使って体

験しろとっています。

もう一つはここです。「ペタゴジーファースト」、学習科学ということですが。ペタゴジーがファーストであって、テクノロジーはサードなんだと。あくまでもテクノロジーファーストではない。もうこれをやると大体失敗する。この考えでICTを使って導入していこうということをやってきました。

黒板がうちは一切なくなりました。チョーク&トークができない。全部、ホワイトボードでやっています。ちょっと変わったところでは、メタバースでの美術鑑賞をやっています。それから低学年のプログラミング。こういうのは当たり前のようにやっているといますけれども、授業も、これまでの一斉で授業をやるという形から、非同期の学びという形に変えていこうじゃないかということをやっています。

あとは、ゼロトラストですよ。ここもちょっと私から言っていたんですけどなかなか予算がなくて実現できなかったんですけども、やっと去年にそれが実現して1人1台端末。子供と一緒に、教師も1人1台端末になります。そのことによってデータの利活用も可能になったし、テレワークも可能になったと。ただ1人1台で、校務や指導の方も全部アクセスできるという環境を整えました。岸田総理に私がプレゼンしたときに、とにかく国策にしてくれと。4万5000円の文鎮にしないでくれということを書いて、その年のいわゆる骨太の方針の中に「国策として」という言葉が入ったという、これはですね、あんまり褒めてもらってないんですけども、私は本当に貢献したと思っています。

あとはメディアリテラシー教育でスマートニュースメディア社と、連携してこれはとってもいいです。お勧めです。あえてフェイクニュースを作るんです。それを授業の中で使って、真実は何だろうかということを考えさせるような授業をやったりとか、あとインテルのスキルスフォーイノベーションという学びを取り入れたりとか。

あとは特別支援教育で一番こだわってるのは、やっぱり科学的な特別支援教育をやっていこうということで、大学だとかそういう研究機関なんかと積極的に連携をしてですね、うちが特にこだわってるのは、PBSっていうのと、それからもう1つRTI。この2つはとっても効果があります。これを特別支援教育に取り入れたことによって、本当に大げさじゃなくてですね、劇的にいろんなものが変わってきました。特別支援教育に対する考え方先生方の考え方が変わって、通常の教育にも生きてきたなっていう思いがしています。

あとはPBLですよ。プレゼンテーション大会をやっています。年々スキルアップしてます。一部の子供が出てくるんじゃないくて、学校で全部予選をやっているんです。その中の代表が出てくる。プレゼンの中身で勝負です。プレゼンの仕方とかそういうのではなくて、全部みんな子供たちがプレゼンの中身を作るんです。先生はできるだけ手を貸さない。子供に作らせて、できるだけ説得できるように数字を使いながら説明する。これは、ランドセル

は重たいんだというプレゼンをやっています。ちなみに、全部子供が調べてるんですよ。説得力ありますよね。これだけ重いものを背負ってきているんだから当然ランドセル障害みたいなものが起きてるっていうことを調べてるんです。

ただ単にこういう現象で終わりではなくて、何をやるかという、子供はこれを解決するためにランドセル会社に行くんですよ。ランドセル会社に行ってこれを解決するためにはどうしたらいいかって専門家に知見をもらってやるっていう。これは一部の例なんですけども、みんなこうやって会社などと繋がって、プレゼンテーションをやるっていうもので、学校だけの学びじゃないんですよ、外の学びと直結すると。

あとは、もう15年間ぐらい戸田市では続けてるんですけど、先生の通信簿のようなものです。人事評価には使いませんが、これはお勧めです。授業がわかりますか、楽しいですかっていうのを、小学校1年生から中学校の3年生まで全員の分をやって、クラウド上で集計するっていうので、いい結果が出ると先生は嬉しいですからね。悪い結果が出ると何が原因だっていうのもわかります。

また、データ利活用のガイドラインっていうのを国に先駆けて作りました。ぜひ活用していただけるとありがたいかなというふうに思っています。これはまさに福祉部との連携なんかでやってくものなんですけど、すべて、小学校の1年生から中学校までやってます。ダッシュボードを作ってるんです。教育委員会だけではできないので、福祉部とも連携しながらこういうダッシュボードを作ってデータベース化をして、それを分析して学校で活用してます。これはプルダウンで子供を選べば全部このデータがいつぺんに出てきます。

例えば、不登校傾向のところはアラートが出るような仕組みをつくってあります。それを、一時はAIの仕組みを入れて2年間でやってたんです。こども家庭庁とデジタル庁の実証事業でもあったんですけど、その予算が切られたので。ものすごくAIの予算って高くて今年に入れてません。人海戦術で教師がその代わりをやっています。でも、怪我の功名で、逆に入れなくてとっても良かったです。

ざっくりな話ですが、結果としては約8割は当たるんですよ。不登校アラートが出るんですよ。この子危ないよっていうので、8割方は先生の見立てと一致してるんです。でも残りの2割は何かというと、1割は間違いなんです。AIが間違っただけデータが出すんです。残りの1割は、先生方が気づかないで、そうだったんだって救われたっていう例もあります。1人でも救われればいいですよ。予算をかけた価値があるんだろうと私は思ってるんですけどね。

不登校に対する考え方って、学校に戻るっていうことがやっぱり私は大前提だと思ってます。いろんなことの取り組みをやっていて、こういうオルタナティブ・プランというのをやっていて、学校って義務と禁止しかないんじ

やないかと、もうちょっとそうではなくて、魅力ある学校にするべきじゃないかということで、こういう学びの場の選択肢をたくさん作ってるところが結構報道されたりしてるんですね。特段のことをやってるわけじゃないですけど。今までは、教育センターと中学校のさわやか相談室しかなかったんです。

ですが、この小学校のやっぱり不登校が深刻だったんで、ここからどうにかしようっていうのをつくったのと、あとはこの教育支援センターが今までうちは退職校長を中心にしてやってたんですよ。退職校長が中心でやってたんですけど、どんどん子供が来なくなっちゃったんです。なぜかっていうと指導しちゃうわけですね。そんなことやってると駄目だ。行けなくなっちゃうよ学校。ちゃんとやれとかって指導しちゃう。そんな強い言い方しないんですが、それでやだってなっちゃったので、民間に委託したんです。予算は変わらないですから退職校長でやってるのと。そしたら、子供たちが増えちゃったので、もう一社、別の企業に運営してもらってるんです。そしたらお互いが競争してるんですよ。競争が起きてサービスが向上して、大人気になってます。

さらに、これができたがために、今度は中学校の中にも相談室ではない、そういう部屋を作らなければいけないということで、来年度予算に向けてそれに取り組んでいるところです。

さらに、報道も結構されましたけれども、カタリバと組んでメタバースの実証事業もやってですね、県立の学校の中にも多様な学びの場をつくるというような取り組みもやりました。

あとは不登校について考える会というのをやって、前は今村さんに来てもらったんですけど、フリースクールの経営者だとかそういう人たちも呼んで、いろんなマッチングをさせるっていうなことをやったり、様々な相談体制をやったりっていうのもやっています。

あとは、教育・学びのプラットフォームというのをやっています。2月1日にやるので、もしよければ品川区の教育委員会の方々も一緒になって繋がってほしいと思います。今度学習指導要領のことをやりますので。毎回200人くらい集まって、オンライン上でやっています。

最後駆け足になりましたが、以上です。

#### ○区長室長

戸ヶ崎様、どうもありがとうございました。

それでは、御講演の内容について質疑を行いたいと思いますけれども、御質問のある方はどうぞよろしくお願いたします。

#### ○濱松委員

ありがとうございました。たくさんあるんですけど、時間の関係で2点ほど。改革の話と、関係性の話について確認させてください。

これまでの慣例とか慣習、よく聞かれる話だと思うんですけど、やっぱりどう突破するか。おそらくほかの市町村でも、自治体でも、誰もが聞いたらやりたいと考えています。私も教育委員になって1年ぐらいになりましたけど、もうやるのは大賛成です。それを突破する鍵。これが1点。

2つ目の関係性のところは、区長とか市長との関係性、独立性も含めた連携をされているというウェブサイト見ましたけども、そういうしっかりタッグを組んでおられるところ、どういうふうなコミュニケーションをとっておられるのか。もう少し聞きたいです。よろしくお願いします。

#### ○戸ヶ崎教育長

突破する鍵というのは本当に今ちょっとお話し申し上げたんですけども、いかに目の前にいる子供のことを真剣に考えるかっていうことなんですよね。本当に子供たちのために、どうしたらいいんだっていうことを考えたら、やっぱりやらざるを得なくなると思います。

ちょっと時間で触れられなかったんですけども、うちは力入れているのが校長会ピアレビューっていうのやってですね、ピアというのは、純粋なピュアではなくて、peerです。ピアレビューっていうのをやっていて、これは、品川でもしやられてなかったら効果あると思うんですけども、自慢話っていうのは大体耳障りというかね、そんな話は聞きたくないんですけど、人の不幸は蜜の味で、うちはこういう失敗したとか、こういうことやったら今こういうクレームが来てと大変な炎上しちゃって大変なんだみたいな話っていうのは入るんですよね。すんなりとそういう話って入るわけですよ。その中で、こういうようなことをやったら効果があったよっていうことをやっていって、やっぱりちょっときな臭いというか、ちょっと危なっかしいような話を共有しておきながら、その中で、少しでもいい話っていうのをに入れていくっていう仕組みを、これは校長会の中で一緒になって作って、今でもずっと続けてやっています。基盤はヒヤリハットを共有すること。その中で、いいことを横展開しようというようなことをやるので、やっぱりそれがお互いに、必要だよ。ここは絶対やんなくちゃいけないよねって教育委員会が言うことは、こういうことだよっていうことを、校長会なりに通訳をして、進めていくっていうのは、これは効果があると思います。

それから、市長との話ですが、2日に1回ぐらいずつ、私と市長とは話をしてるんですけども、私は非常に大事だなというふうに思ってるのは、適度な緊張感という言葉なんです。余りにも親密になると。駄目なんです。遠慮が出てきて、改革しようと思っても改革できない部分があるので、適度なバリアを引いておくっていうのがものすごく大事で。逆に学校にしてみたらそういうことを言われたら困るということであっても、学校に対して、市長の立場になって説得するような話をすることもあります。

だからそのバランスをいかに取るかって非常に重要で、これはまさに教育長の役目だろうというふうに思ってるんですけども、それはどのぐらい

のどういうポイントっていうのが、一般化されたものっていうのがあるわけではないので、大事なのは適度な緊張感です。これがなくなるというのは絶対良くないだっっていうのは、常々思ってます。よろしいでしょうか。

○区長室長

ほかにいかがでしょうか。

○吉村教育長職務代理者

教育委員の吉村といいます。どうもありがとうございました。

本当にメモしきれないぐらい、参考になるお話がたくさんあって、質問したいこともたくさんあります。すごく最初共感をしたのは、これは私の解釈ですけど、教育改革をするということの根底に、先生のお言葉で言うと、学校村の意識改革っていう言葉であったり、あと、それを変えていくためには風土と水っていう考えが必要なんだということであったり、あと現実的なことと言うと、戸田の学校は、以前から非行問題が非常にあったんだと、そういうのが根底にあって、それを変えていくためのいろんな手だてが、今日お話いただいたことだというふうに解釈してるんですけど、そのときに、例えばすべての先進校を視察校するという、システムとしてある意味トップダウン的にやってることなのかなと、そういうトップダウン的にやってることと、先ほどの校長先生からいろいろ面談したりいろいろ聞いたりすること、教育委員さんからも提案を受けたりすることなどボトムアップ的にやってること、その両方のバランスをどのように考えていったのか。ひょっとすると、長い間の中で前半はどちらかと言うと、トップダウン的なものにウエイトがかかってたかもしれない。でもだんだん、ボトムアップしていったのか、その辺のところを一つ。もう一つは、簡単なことなんすけど、これだけたくさんあることを進めていくのに、事務局の中に何か特別な推進の組織というのは何かあるんでしょうか。そういうことを伺いたい。

○戸ヶ崎教育長

前半の話でボトムアップとトップダウンの話なんですけど、これはですね、校長に常に言ってるのは、1年目で改革できないものは2年目では改革できないっていう、これは新任校長に必ず言ってる言葉なんです。それは、2年目になると、思い切った改革をしようと思っても遠慮が出てきてしまうので、変えるんだったら1年目がチャンスだということできずと言いつけていて、私自身もポリシーとして1年目は意識していました。もう大変だったです。校長会で腕組みして、私が言うたびに首をかしげる校長もいたんです。不貞腐れてるわけですね。でもそれをエネルギーに変えて、1年目はこうやっていくからなんてことはもうブレないで、だんだん緩くしていく。2年目になったら、少しずつ任せ、3年目になったらもっと任せ、やっぱりそこは手法として、何でも当てはまることなのかなというふうに思っていますね。

だから1年目は相当ワンマンというか、こういうのをやるぞって有無を言わずやってきたっていうのがあります。

産官学の連携なんかも、0だったわけですが今100以上のところでやってますけど、スタートは自分が持ってきて、そこでの連携はどこかしらやりなさいよって初めはやってたんですよね。当然反発はものすごくあったんですけど、初めからだんだんゆるめていこうという構想があったので、そこが結果的にはうまくいったのかなっていうふうに思います。

あとは教育委員会の組織なんですけれども、スタートの時点で、これはまさに市長と連携し、今までなかったんですけど教育政策室っていうのを作って、今はあまりやってませんが、プロパーとして教育行政プロ採用みたいなどの取り組みなんかもやったりしました。今も期限付きで採用している職員もいます。中の人間だけで自前主義でやっていくのはかなり苦しいので、プロパー採用も何人か必要でした。だからといってやたら採用すると、その人のキャリアというのが難しくなってしまう、予算もかかりますし、その辺の兼ね合いっていうのは非常に難しい。あとは、中で研修ですよ。教育委員会にきた行政職員なんかも教育の勉強をしっかりとってもらっています。学習指導要領と地教行法は読んでもらっています。これは教育委員さんも同じなんです。この二つだけは必ず読んで教育を論じてくれということはおっしゃっています。

#### ○区長室長

ほかはいかがでしょうか。よろしくお願いします。

#### ○稲垣委員

お話ありがとうございました。教育委員の稲垣と申します。

もう本当にお話しどれを聞いていてもわくわくして、本当に素晴らしいなと思ってたんですけども、やはり、先ほどおっしゃった教育委員会が追認の機関になっているというのがすごく私自身も、今も委員なって1年ほどなんですけれども気になってまして、どういうふうに改革を進めていけば、事務局の方の負担もそれほど増えず、うまく回っていくのかなと。本当に変えたい思いが強くて。どうやったら、変わっていけるのかなっていう何かヒントがあったら教えていただきたいなど。すごい漠然として申しわけないんですけども。

#### ○戸ヶ崎教育長

提案制度は絶対にお勧めですよ。事務局は、確かに負担なんです。教育委員さんから提案されるたびにポンチ絵を作って、平均すると5枚ぐらいのポンチ絵になるんですけどね。大体時間にすると1個の提案に対して1時間ぐらいかかるんです。報告とそれから教育委員さん自身が質疑応答する。

全員が意見を言いますので、1本につき1時間ぐらいかかるので、それに耐え得るようなポンチ絵つくるんです。事務局にとってみると負担なんですけど、それがまさに学びなんですよね。初めは大変だっという意見があったんですけども、それがルーチンというか当たり前になってくると、当然今までやっている自分たちの仕事のことも、それ以外のことも一旦整理する場になってるわけですよ。だから、私の耳に入ってくるのは、ありがたいっていう言葉は入ってますね。

ただ、そのためには教育委員さんも大変で、何かネットで調べた情報をそこで話したら全く説得力がないので、いかに現場に足を運んで現場の実態を把握してもらってというのが大事なんですよ。だからもちろん、この間もうちの教育委員さんたちの報酬をあげなくちゃいけないんじゃないかって話すぐらいに大変なんです。学校訪問とか指導訪問とか管理訪問とかそういうところに全部行くんです。もちろんお仕事の都合で行けないっていうのはあるんですけど、それをやらないと現場の実態って見えないんですよ。ただ中にただけでは駄目なので。

あとは移動教育委員会みたいなもの、役所じゃなくて場所を変えて教育委員会をやって、そこでいろんな意見を聞いたりだとか、そういうこともやってるので、いろんなそういう事例が先ほどの報告書の中にも、書いてあるので、そういうのを見ていただくというのもいいかもしれない。一番は提案制度だとは思ってるんですけどね。お互いにとって大変なんですけどやっぱりそれをやることによって、自分事にそれぞれ上がってくるっていうのがあるんで、これは絶対お勧めだと思います。

○区長室長

ほかはいかがでしょうか。はい。お願いします。

○吉原委員

とても充実したお話で、今頭の中がいっぱい質問できることはないんですが、一言も感謝を申し上げます。教育委員が必ず読まなくてはならないもの、先ほどQRコードで出していただきましたけれども、勉強したいと思いました。ありがとうございました。

○区長室長

そのほか、いかがでしょうか。お願いします。

○森澤区長

ありがとうございました。

本当にたくさんの取り組みをされていて、どこからスタートするのがいいのかなっていうのも聞きながら思っていたところではあるんですけども、やっぱり何か最終的にはその学校が自走して、暴走しちゃうぐらい自走するっ

ていうのは、またそれはその新しい取り組みにチャレンジしていったというの、すごく素敵だなというふうに思ったんですけども、何かそういう、さっき言った校長先生に1年目じゃないと改革できないというのは、変えていきたいとか、もっと良くしていきたいっていう意欲がないと、自走のための元がないと、なかなか走っていけないなというふうに思っていて、そのベースは戸田市の中の、教育委員会も含めて方向性を見せた上でやっていくっていうことなんですよね。先生たちは絶対にあるというふうには思うんですけども、そこを高めていくってのはどうやって高めているのかなっていうのがすごく気になりました。というのと、どこからスタートしたんでしょうか。

#### ○戸ヶ崎教育長

うちは校長会の研修会を充実させてるんです。できるだけ、そこは教育委員会は干渉しないようにしており、自主的にいろんな人を呼んだりだとか、教育界の尖った人を講師で呼んだりだとかっていろいろ勝手にやってるわけです。そういう中で、何かそのまま真似しようというのではなくて、どういうものがうちの中で取り入れられるんだろうかってことを自主的に勉強してもらってる。あわせて、校長会と教育委員会事務局で私はできるだけ入らないようにしてるんですけども、事務局等との意見交換会みたいなものを定期的にやって、それぞれがこれはやれるけど、これは無理だっていうようなことなんかについても、定期的に話をしてるんですよ。

だから、産官学の連携をやるって言っても、何でもかんでも入れられるものではないし、本当に自分たちにとってプラスになるのはこういうことですよっていうのを、率直に意見を出してもらっていう会なんかもやってるんです。そのベースにあるのは心理的安全性です。何でもいえると。これを言っちゃったら何か評価に繋がるんじゃないかなとかっていうそういうような、雰囲気なると絶対駄目なので、ノーが言える雰囲気かどうかですよ。やだとか、できませんとか、駄目だとかっていうことがいえる雰囲気をいかに作るかっていうのが、非常にマナー的にはよろしくないんですけども、でもそういう雰囲気がないと、陰で言うようになるともう進まないんで、文句あったらその場で言えっていうのは徹してですね。もう戻ったらやるっていうのはもう徹底してます。

お互いの意見交換で、常に意思疎通を図るっていう習慣はちょっとエネルギーをかけてきたかなっていう気はしてますね。対話をしないと始まらないとかですね、人間てやっぱり本音がわからないとできないですからね。全然答えになってないんですけど。

で、何から始めたかということなんですけど、今日は提示してないんですけど、教育の映画を見たりだとか、そういうのはやりましたね。

結構有名などころではハイテックハイってご存知ですよ。あんなに有名になる前に入手して、大会議室の中で校長呼んだりとかして、そこで議論し

たりして。こういう姿を目指したいと思ってるんだけどもどうだって話をすると、こんなものできるわけないでしょっていう意見とかね、やりたいですよねっていう意見だとか、様々出てくるわけですよ。やっぱりそういう中で、まさに熟議して、本音ベースでやるっていうようなことを定期的にやりましたね。何かイメージできるようなものっていうのを持たせないといけないので。

あとは本なんかもそうです。本なんかについて、こういう本があるんだけどっていう改革の本を渡してね、皆で読んで共有したりだとかそういうイメージづくりっていうのはやりました。

#### ○伊崎教育長

ありがとうございました。質問というか、今、区長が聞いてくださったんですが、私も本当にどうしたら学校が自走するかというところを色々試行錯誤しながらやっていて、こちらで仕掛けをつくることから始めないと難しいのかなと講演を聞いて感じたところです。おそらく、品川の土壌と戸田市さんの改革以前の土壌はまた違うと思いますので、同じ手法が適切かどうかというところもあるかと思うんですけども、非常に勉強させていただきました。ありがとうございました。

#### ○戸ヶ崎教育長

年中校長たちには、何かあったら気楽に教育長室来て相談に乗るからねっていうのはずっと言ってんですよ。でも、10年間1人も来たことがないんです。本気で言ってるんですよ。何でもいいから、小さいことでもいいから、悩みあったら相談にきなよって。何か持ってこいとは言わないから、聞きにこいよって言うんですけど、1回も誰も来たことないですね。やっぱりそれだけハードルが高いというか、そこまでは言えないよっていうのもあると思うんですよ。だけど、出向いていったときに学校訪問の時には必ず会話をしたり、あんまりわかってあげ過ぎるのも良くないし、距離感がありすぎるのも良くないし。

教育長って出身で大きく3分類あり、一つは、私のように教員出身者の教育長と、それから民間の教育長とね。あとは、行政出身の教育長と、3種類いて、報告書の中にも書いてあるんですけど、それぞれにメリットとデメリットがあるわけです。逆に強み弱みがあるんですよ。それは変えようと思っても変えられないというか、自分の背景が違うわけですから、それは学校現場の校長たちもわかってるわけですよ。この教育長の強みはこうだっていうのは。どんどん強みを前面に出すっていうのが、私は大事なんじゃないかなと思ってるんですよ。だから、行政に強いということであれば行政の感覚ではこうだということをおね、しっかりと校長たちに話して、サポートするってことを前面に出して、それから、教育の内容についてはいちいち口出ししないよっていうこと、それから事務局のほうでそれはバトンタッチし

て、言ってもらってというような構造をつかってやっていった方が、弱みも見せられるというか、何でも強みだけでやっていこうといてもなかなか無理ですからね、ここは弱みなんだということはもう言わなくて相手はわかっているんで、そこを逆に遠慮なしで進めていくっていうのは大事なのかなと思いますよね。

#### ○森澤区長

もう1つ聞いてもいいですか。私もこの前学校の発表を見に行かせていただいたときに、本当に先生たち大変だなと思っていて、さっきのお話の中であったように、子供たちがこれから生きる社会と、今まで先生たちが学んできた社会って全然違うわけじゃないですか。そういう中で、先生たちがこれからの社会をちゃんと体感とか実感をしなきゃいけないみたいな話があったと思うんですけど、それって戸田市の先生たちはどこで得ているんですか。民間との連携の中で得るのか、それとも何かを見に行ったりとかをしているのか。

#### ○戸ヶ崎教育長

両方ですね。やっぱり産官学と連携していると、そういう話って否が応でも入ってくるわけじゃないですか。民間の方々が当たり前のように学校の中に入ってきてますから。あと大事なのは、保護者の声をよく聞けっていうところを言ってるんですよ。というのは、保護者というのは一流の企業人がたくさんいるわけですよ。なんかね、産官学の連携をやると、何か違う人たちでやるような感じするんですけど、実はある一流企業の幹部の方が保護者にいたりするって、当たり前のようにあるじゃないですか。だからそういう方々の持っているスキルを借りるといってか、どんどん学校の中に入れるっていうことをやって、それで成功してる学校もありますし、そうすれば、否が応でも自分たちの考え方っていうのは村社会なんだなっていうことに気づきますしね。

あとは、あわせて研修だとかいうものっていうのは、学校がそれぞれいろんな人を呼んだりだとか、未来を感じられるような研修っていうのは意図的にやっています。やっぱりそういうのを意図的にやらないと、知れって言われても、イメージが描けないので。イメージを描くための研修会っていうのは、いちいち教育委員会が干渉したりはしてないんですけど、積極的に取り組んでやってるかなという気はしています。

#### ○新井副区長

どうしたら教育改革が進められるのかなとか、こうすれば、教育改革が進められるんだろうなってぼんやりと思ってたものが、何かもうすごい具体化されて、まさにその通りだっていうふうに感じられたので、何かものすごく、すっきりしました。気持ちよかったです。やっぱり、教師じゃなくて、チル

ドレンファーストで子供たちを第一に考えたりだとか、透明性だったりとか、あとは、最後は強い意志なんだろうなっていう、そこをしっかりと持ってやっていくことなんだろうなっていうのはすごく感じられたので、ご質問はございません。ありがとうございます。

○区長室長

そのほか、いかがでございましょう。よろしいですかね。ありがとうございます。

それでは、講演のほうを終了させていただきます。戸ヶ崎様、どうありがとうございました。もう一度大きな拍手をお願いいたします。(拍手)

○戸ヶ崎教育長

わからない部分とか、具体的に事務局の方々にこれ知りたいっていうのがありましたら、遠慮なく事務局に連絡してもらって結構ですので、品川から連絡あるよっていう話はしておりますので、快く受けるように伝えておきます。ありがとうございました。(拍手)

○区長室長

それでは、これで令和6年度第2回品川区総合教育会議を終了したいと思います。ありがとうございました。

— 了 —